

S2-3 より良い在宅医療における多職種連携の実践と課題 薬局薬剤師の立場から

株式会社ゆうホールディングス

○小林 篤史

S2-4 地域医療の中での緩和ケア ～病院薬剤師と在宅緩和ケア～

公立豊岡病院組合立 朝来医療センター 薬剤部

○辻井 聡容

S2-5 訪問看護ステーション平成の在宅医療における多職種協働の現状

株式会社平成調剤薬局 介護部門・訪問看護ステーション 平成

○井上 伸

◆9月7日(土) 1日目:第1会場(D101 講堂)

シンポジウム3

(15:50～17:40)

「医薬協業」を推進する医療人教育

オーガナイザー:立命館大学 薬学部

西村 桂子

オーガナイザー兼座長:京都薬科大学 臨床薬学教育研究センター

楠本 正明

オーガナイザー兼座長:大阪薬科大学 臨床薬学教育研究センター

角山 香織

S3-1 医薬協業を推進する医療人教育 一薬剤処方まつわる「部分主義」

洛和会ヘルスケアシステム

○松村 理司

S3-2 「医薬協業」を推進する医療人教育～医薬協業の推進に求められる教育とは～
～救急対応における他職種との協業を通して

近畿大学病院 総合医学教育研修センター

○窪田 愛恵

S3-3 医薬協業の推進に求められる教育とは?
～緩和医療の現場における医師、看護師との協業について～

京都薬科大学 臨床薬学教育研究センター

○松村千佳子

◆9月7日(土) 1日目:第2会場(D301 講義室)

シンポジウム4

(15:50~17:20)

地域医療における医薬品情報

オーガナイザー兼座長: 明治薬科大学 緒方 宏泰
座長: 有限会社プライマリーファーマシー 山村 真一

S4-1 シンポジウムを企画して

明治薬科大学
○緒方 宏泰

S4-2 地域医療における医薬品情報 地域における医薬品情報の取り扱い、これまでとこれから

厚生労働省 医薬・生活衛生局
○磯部 総一郎

S4-3 地域のかかりつけ医における医薬品情報、これまでとこれから

近藤医院
○近藤 太郎

S4-4 教育・研究で支える地域医療における医薬品情報

名城大学 薬学部
○大津 史子

◆9月8日(日) 2日目:第1会場(D101 講堂)

シンポジウム5

(10:00~12:00)

薬業連携(平成30年度患者のための薬局ビジョン推進事業)

~患者への入院、退院支援でよかったことと、悪かったこと~

オーガナイザー兼座長: 一般社団法人大阪府薬剤師会 藤垣 哲彦
オーガナイザー兼座長: 一般社団法人堺市薬剤師会/ぷれも薬局 三国ヶ丘店 柚本アヤ子

S5-1 「平成30年度患者のための薬局ビジョン推進事業」における
薬業連携における行政からの考察

大阪府健康医療部薬務課 医薬品流通グループ
○中川 善嗣

S5-2 「患者のための薬局ビジョン推進事業」において 薬業連携(入退院支援)における
病院からの考察

堺市立総合医療センター 薬剤・技術局 薬剤科
○藤井 一美

S5-3 「平成 30 年度患者のための薬局ビジョン推進事業」における薬業連携における
保険薬局からの考察

一般社団法人堺市薬剤師会 会営薬局
○靱山 陽子

S5-4 在宅患者の入退院における病診薬連携利活用の症例報告

一般社団法人大阪府薬剤師会
○篠原 裕子

◆9月8日(日) 2日目: 第1会場 (D101 講堂)

シンポジウム6

(13:20~15:20)

薬局におけるプライマリケア ~その実践と将来ビジョン~

オーガナイザー兼座長: 神戸アイライト協会 中川 由衣

S6-1 各種測定機器を使った店頭相談と健康長寿生活の提案

一般社団法人川西市薬剤師会
○秋本 常久

S6-2 患者紹介状を使用した医療機関への受診勧奨とその後のフォローアップ

深井ファミリー薬局
○金田 仁孝

S6-3 10年後のプライマリケアの薬剤師 ~超高齢化と AI の時代のわが国の薬剤師の将来像~

株式会社パスカルシステム パスカル薬局
○横井 正之

◆9月7日(土) 1日目: 第4会場 (D305 講義室)

ワークショップ1

(13:00~15:30)

臨床判断ワークショップ 体験版 ~発疹~

講師: 昭和大学医学部 薬理学講座 医科薬理学部門	木内 祐二
ファシリテーター: みどり薬局	坂口 眞弓
ファシリテーター: 昭和大学薬学部 社会健康薬学講座 医薬品評価薬学部門	亀井 大輔
ファシリテーター: 株式会社横須賀薬局	中山 邦
ファシリテーター: 神戸アイライト協会	中川 由衣
ファシリテーター: 一般社団法人堺市薬剤師会/ふれも薬局 三国ヶ丘店	柚本アヤ子
ファシリテーター: 医療法人前橋北病院	山岡 和幸

◆9月7日(土) 1日目:第4会場(D305 講義室)

ワークショップ2

(15:45~17:45)

標準薬物治療ワークショップ①「尿路感染症」

オーガナイザー兼座長:SUBARU 健康保険組合 太田記念病院 薬剤部 山藤 満

演者:草加市立病院 薬剤部 本石 寛行
 ファシリテーター:那須赤十字病院 薬剤部 高野 尊行

◆9月8日(日) 2日目:第4会場(D305 講義室)

ワークショップ3

(10:00~12:00)

多職種連携の中でどう活かすか? ~実践的吸入支援の基本(講演と実技)~

オーガナイザー:一般社団法人京都府薬剤師会 川勝 一雄
 オーガナイザー:三菱京都病院 呼吸器・アレルギー内科 安場 広高
 オーガナイザー:大阪赤十字病院 呼吸器内科 吉村 千恵
 司会:京都大学医学部附属病院 呼吸器内科 谷村 和哉

薬剤師が知っておくべき、喘息・COPDの基本的な知識

大阪府済生会中津病院 薬剤部
 ○三木 芳晃

薬剤師が伝えたい、吸入支援のポイント

一般社団法人京都府薬剤師会
 ○腰山 節子

ロールプレイを用いてやってみよう!

京都大学医学部附属病院 呼吸器内科
 ○谷村 和哉

ファシリテーター:吸入療法のステップアップをめざす会

京都大学医学部附属病院 呼吸器内科	谷村 和哉
日本赤十字社大阪赤十字病院 薬剤部	畔柳 弥生
大垣市民病院 呼吸器内科	白木 晶
吹田市民病院 薬剤部	竹村 充代
京都府立医科大学附属病院 薬剤部	小西 洋子
大阪府済生会中津病院 呼吸器内科	上田 哲也
大阪南医療センター 呼吸器内科	山本 傑
上六薬局	真野 有紀
おぐまファミリークリニック	小熊 哲也
三菱京都病院 呼吸器・アレルギー内科	安場 広高
大阪赤十字病院 呼吸器内科	吉村 千恵
聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院 呼吸器内科	駒瀬 裕子

◆9月8日(日) 2日目: 第4会場 (D305 講義室)

ワークショップ4

(13:20~15:20)

標準薬物治療ワークショップ②「心不全」

オーガナイザー兼座長: SUBARU 健康保険組合 太田記念病院 薬剤部 山藤 満

演者: 草加市立病院 薬剤部 本石 寛行

演者: 東京慈恵会医科大学 臨床薬理学講座 志賀 剛

◆9月7日(土) 1日目: 第3会場 (D302 講義室)

ランチョンセミナー1

(11:50~12:50)

座長: 大阪医科大学附属病院 内山 和久

遺伝子パネル検査による新時代の幕開け

大阪医科大学附属病院 化学療法センター

○寺澤 哲志

共催: 中外製薬株式会社

◆9月8日(日) 2日目: 第3会場 (D302 講義室)

ランチョンセミナー2

(12:10~13:10)

座長: 神戸市立医療センター中央市民病院 薬剤部 橋田 亨

炎症性腸疾患薬物療法の進歩

兵庫医科大学 腸管病態解析学

○渡辺 憲治

共催: 日本化薬株式会社

◆9月8日(日) 2日目:第2会場(D301 講義室)

一般演題

(10:00~10:30)

座長:ファルメディコ株式会社 狭間 研至

O-1 薬剤師中間介入研究(PHIS)の概要と成果

明治薬科大学

○三上 明子

O-2 メタアナリシスを用いた再発寛解型多発性硬化症におけるテリフルノミドとフマル酸ジメチルの有効性と安全性の比較

武蔵野大学薬学部 臨床薬学センター

○城間 光希、益戸智香子、小川ゆかり、小清水治太、田島 純一、西牟田章戸、湯浅 勝敏、吉井 智子、高尾 良洋、三原 潔

O-3 重度慢性腎臓病を合併する心房細動患者を対象とした長期抗凝固療法に関する調査

東京女子医科大学病院 薬剤部¹⁾、国際医療福祉大学熱海病院 薬剤部²⁾、

東京女子医科大学病院 循環器内科³⁾、慈恵医科大学臨床薬理学⁴⁾、明治薬科大学⁵⁾

○平井 浩二¹⁾、長沼美代子²⁾、志賀 剛^{3,4)}、鈴木 敦³⁾、越前 宏俊⁵⁾、浜田 幸宏¹⁾、萩原 誠久³⁾、木村 利美¹⁾

◆9月7日(土) 1日目:D棟1階 学生ラウンジ

ポスター示説

(17:45~18:15)

P-1 小児に処方されやすい医薬品の傾向~NDB オープンデータから見えるもの

JA 北海道厚生連 帯広厚生病院

○佐藤 弘康、河端 真以、猪谷 朱理、久保 萌美、荒井 理乃、田村 広志、渡辺 浩明

P-2 総合診療科病棟におけるプレアボイド報告からみた医療経済効果の推算

JA 北海道厚生連 倶知安厚生病院

○山田 航輔、齋藤俊一郎、船木 映二、橋本 義宏

P-3 「薬剤師による臨床判断研修会」(トリアージ研修会)の実施と参加薬剤師へのアンケート—第3報—

一般社団法人 堺市薬剤師会

○野上貴三子、金田 仁孝、柚本アヤ子、中辻 里美、中川 綾子、高山 宏、奥 恭弘、水野 優香、平栗 涼子、岡部 哲範

P-4 直接経口抗凝固薬の臨床薬物動態に影響を与える因子の解析と臓器障害時の変化に関する考察

医療法人社団 緑成会 横浜総合病院¹⁾、明治薬科大学 名誉教授²⁾

○内田 仁樹¹⁾、佐村 優¹⁾、小町 和樹¹⁾、腰岡 桜¹⁾、南雲 史雄¹⁾、稲垣 和幸¹⁾、廣瀬 直樹¹⁾、関根 寿一¹⁾、緒方 宏泰²⁾

大会長講演

大会長講演

今こそ求められる医薬協業

ファルメディコ株式会社

○狭間 研至

「住み慣れた地域で最期まで」を実現する「地域包括ケアシステム」の実現に向けて、様々な施策が実施されはじめている。なかでも、6年制教育に移行して13年が経過した薬剤師や、5万9千軒に達する薬局という医療における社会資源をどのように活用するかは、高齢化と少子化が同時に進行する我が国では、成功のカギを握る重要な因子となりつつある。

一方、この数年、「医師の働き方改革」や「永続性のある国民皆保険制度の堅持」という、我が国の医療提供体制を従来とは異なった視点から見直すべきだと考えさせられる事案が明らかになってきた。私自身は、医師、薬局経営者、そして病院運営に携わるものとして、これら2つの問題には、医師と薬剤師が今までとは異なる連携を組むことが重要ではないかと考えている。

まず、「医師の働き方改革」については、医療において「診断と救命」が医師でしかなしえない仕事であることを考えると、急増する医療ニーズに急増しない医師で対応することから考えても、この2つ以外の業務を、他の医療職種と、いかにタスクシフト・タスクシェアリングを行っていくのが重要となるはずだ。その中において、薬物治療管理については、医師が診断と基本的な治療方針を決めた後は、薬剤師が薬理学・薬物動態学・製剤学といった薬学的専門性を活かし、医師と連携して患者さんに関わっていくことが求められる。この取り組みの中で、多剤併用や薬剤性有害事象の回避などを通じて、医療の安全性を担保しながら、医師の総合的な監督下に投薬・服薬管理に伴うタスクを薬剤師にシフトしていくはずだ。

また、非常に高額な医薬品が保険適用され「大きなリスクは共助、小さなリスクは互助」という基本方針に照らせば、風邪や腹痛、下痢などの軽度の症状については、OTC医薬品を積極的に用いるべきだ。もちろん、この際にも、薬剤師が服用後の状況をフォローして、期待される治療効果が得られない場合には、医師へ受診勧奨しなくてはならない。さらに、生活習慣病の薬物治療管理なども医師と薬剤師の連携を深めることで、その重心を薬剤師にシフトしていくことが重要である。

このような取り組みをシステムティックに行っていくためには、薬剤師の本質的な業務のあり方を見直し、医師と薬剤師の連携を進め、診療報酬・調剤報酬制度の改定を、多面的に捉え同時に進行していく必要がある。折しも、2015年に厚生労働省から示された「患者のための薬局ビジョン」、2018年に示された医薬品医療機器等法・薬剤師法改正の方向性、さらには、2019年に示された調剤業務のあり方に関する課長通知など、様々な方向性が国からは呈示されている。「医薬協業型薬物治療管理」という新しい治療戦略は、今後ますます重要になるだろう。

略 歴

ファルメディコ株式会社 代表取締役社長

一般社団法人 日本在宅薬学会 理事長

医療法人嘉健会 思温病院 理事長・院長

熊本大学薬学部・熊本大学大学院薬学教育部 臨床教授

京都薬科大学 客員教授

平成7年 大阪大学医学部卒業後、大阪大学医学部付属病院、大阪府立病院（現 大阪急性期・総合医療センター）、宝塚市立病院で外科・呼吸器外科診療に従事。

平成12年 大阪大学大学院医学系研究科臓器制御外科にて異種移植をテーマとした研究および臨床業務に携わる。

平成16年 同修了後、現職。

医師、医学博士、一般社団法人 日本外科学会 認定登録医。現在は、地域医療の現場で医師として診療も行うとともに、一般社団法人 薬剤師あゆみの会・一般社団法人 日本在宅薬学会の理事長として薬剤師生涯教育に、岡山大学、長崎大学、愛知学院大学、青森大学、摂南大学、東京理科大学、名城大学の非常勤講師として薬学教育にも携わっている。

基調講演

基調講演

六年制薬学教育・薬剤師教育の抱える課題 ～薬学・薬剤師は生き残れるか？～

大阪薬科大学

○政田 幹夫

薬学教育のトピックは、何と言っても、2004年の学校教育法並びに薬剤師法の改正であろう。欧米先進諸国に肩を並べるべく、薬学教育6年制が取り入れられ、2006年の入学者から適用された。薬剤師免許についても、過渡的な期間を経た後、2018年度入学者からは6年制薬学教育課程を修めた卒業生のみ薬剤師国家試験受験資格が与えられることになった。2015年度入学者から適用された改訂モデルコア・カリキュラムにおいては、学習成果基盤型教育を取り入れ、到達目標として10項目の薬剤師として求められる基本的な資質が示されたことは、薬学教育が医療人育成に舵を切ったと言える。「命の尊さ」、「高い生命倫理観」を修得した薬学臨床家、薬学・生命科学研究者の育成を目指し、新時代の薬学教育の模範と成る大学創りが急務となった。薬学士としての基盤の上に総合的な人間力並びに専門領域の知識・技能を積み上げ、更には臨床における体験型の実務実習を必須とする新しい教育制度を整備することが求められたが、果たして現状は？

医療現場で医学教育に約30年間関わった者として、本シンポジウムにおいて薬学教育の抱える問題点と解決法を考えてみたい。

略 歴

昭和48年	京都大学薬学部卒	平成3年	福井医科大学医学部附属病院 薬剤部長
昭和54年	京都大学大学院薬学研究科博士課程修了	平成6年	福井医科大学教授・附属病院薬剤部長
昭和56年	京都大学医学部附属病院薬剤部 薬剤師	平成15年	福井大学医学部教授・附属病院薬剤部長（統合により名称変更）
昭和57年	城西大学薬学部講師 薬剤学講座	平成27年	大阪薬科大学 学長、福井大学医学部名誉教授
昭和60年	摂南大学薬学部助教授 薬剤学講座		現在に至る
平成元年	京都大学胸部疾患研究所附属病院 薬剤部長		

教育講演
